

第2節 多様な動きを経験する

近年、地域や家庭において戸外で遊ぶ機会が不足し、幼児の体力の低下や生活リズムの乱れが課題となっている。幼児が全身を思い切り使って自らの運動欲求を満たし、多様な動きに親しむことは、幼児期に必要な基本的な動きを身に付けるだけでなく、心と体の調和のとれた発達へとつながる。教師は、幼児の発想や興味を大切に自ら様々な活動に取り組んでいくような工夫が必要である。

ここでは、3年保育3歳児の実践事例として、感触の心地よさから心を開放させて体を動かす姿（事例1「冷たくて気持ちいい」）、固定遊具に親しむ中で自分なりの動きを試す姿（事例2「もっと遠くに跳びたい」）、自分の作った物を使って体を動かす姿（事例3「凧と一緒に走ろう」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P52～P55）

1 幼児の実態（3年保育3歳児クラス 20名）

入園当初は、初めての集団生活に不安を示す様子が見られたが、教師との関わりに慣れ、気持ちの拠り所となる場所や好きな遊具を見つけられるようになってきている。保育室で好きな遊びが見つかり、戸外でも安心して過ごせるようになり、滑り台やブランコ等の固定遊具に興味をもち、意欲的に取り組む姿が見られる。中には、自分の思うように動くことが難しかったり、体を動かして遊ぶことに抵抗があり、取り組むまでに時間がかかったりする幼児もいる。

2 指導のねらい

- ・感触に親しみ、開放感を味わいながら楽しむ。（事例1）
- ・興味をもった遊びを繰り返し楽しみ、自分なりの動きを試そうとする。（事例2）
- ・作った物を遊びに取り入れ、思い切り走る心地よさを感じる。（事例3）

3 指導を行う際に主に考慮する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

- ・幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3（1）「健康な心と体」]

- ・身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3（2）「自立心」]

- ・心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3（10）「豊かな感性と表現」]

4 内容

- ・砂や水等の感触を感じながら、自分なりに取り組む。(事例1)
- ・固定遊具での遊びに興味をもち、繰り返し試す。(事例2)
- ・クレヨンやセロハンテープで自分の凧を作り、使って遊ぶ。(事例3)

5 環境構成のポイント

- ・あらかじめ砂場の砂を掘り起こし、タライに水を張っておくことで、すぐに遊び始められるようにする。(事例1)
- ・家庭によっては、砂や泥に思い切り触れたり、衣服が汚れたりすることに抵抗感をもつ場合もある。保護者会などの機会に、活動の意味を伝え、理解を得られるようにする。(事例1)
- ・どの幼児も満足して遊べるように、道具(ラバーリング)の数を十分に揃えておく。(事例2)
- ・幼児の技能で仕上げる事が可能な部分を残しながら教材を用意する。(事例3)

6 活動の展開と評価

(1) 事例1 冷たくて気持ちいい (5月中旬)

A児は朝の支度が済むと、すぐに裸足になって砂場へ駆け出していく。タライに張られた水を腕で汲み、足元に流し水が掛かることを喜ぶ。その様子にB児も興味をもち、同じようにタライから水を汲み出して、A児と同じ場所に流す。徐々に水が溜まっていくと、A児は持っていた腕をその場に置き、水溜まりに両腕を入れる。

A児「気持ちいいなあ！ドロドロ。(両腕を大きく回しながら泥をかき混ぜる)」

B児「Bちゃんもする！ドロドロ。(A児と同様に泥をかき混ぜる)」

A児「よし、もっといっぱい水入れて泥んこにしようよ。」

二人とも先程と同様に、タライの水を何度も汲み出す。徐々に水溜まりの範囲が広がっていく。

A児「すごい、海になったぞ。ようし、今度は入ってみよう。」と、両脚を入れる。

A児「きゃー！冷たい。先生も入ってみなよ。」

教師「いいよ、先生もおじゃまします。(足を入れる) 本当だ、冷たくて気持ちいいね。」

すぐにB児も一緒に入り、歓声をあげる。A児は泥の奥底まで足を入れようと足首を回しながら動かしたり、片足で立ち「ドロドロ」と言いながらもう一方の足を左右に揺らして泥を混ぜるようにしたりする。しばらくすると足だけでなく両手も水に付けて四つ這いになって泥の中を歩く。片付けの頃には、手足だけでなく衣服も泥だらけになっている。

A児B児ともに、満足そうな表情で保育室へ戻って来る。



○事例1に対する評価

(幼児理解、ねらいや内容の妥当性)

水や泥の感触の面白さから、腕や脚を大きく動かしてみたり、片足を軸にしなが
ら脚を回してみたりする動きが引き出されたと考えられる。入園当初、緊張し
た気持ちを抱えている幼児にとって、感覚的な心地よさを感じられる遊びを用意
することは、体も心も開放して楽しむ機会となり、安心して過ごすきっかけとな
ることから、ねらいの設定は妥当であったと考える。

(環境構成、教師の援助、家庭との連携)

教師は砂場での遊びがしやすいように、あらかじめ砂を掘り起こしておいた。
それにより、幼児は思い通りの動きができ、自分なりの動きへつながった。これら
の動きを、教師が十分に受け止め、一緒に楽しむ時間をもつことで、幼児は安心し
て楽しむことができた。

また、水を張るためにタライを用意したが、予想以上の量を使うことから、途中
で何度も追加する必要があった。タライの大きさや数等の検討が必要である。

事前に家庭の理解を得たことによって、幼児は砂や泥に思い切り触れることが
でき、意欲がさらに高まり、遊びを存分に楽しむ姿へつながった。

(2) 事例2 もっと遠くに跳びたい (9月上旬)

固定遊具を使い、上に乗ったり中に潜ったりする。当初は一段ずつ上り下りする
動きが中心だったが、慣れてくると素早く駆け上がったり、段を抜かして跳び下り
たりする動きが加わる。C児は、跳び下りる際に足を踏み切ることで、遠くに着地
しようとする。

教師「(着地した場所を指で示しながら)Cちゃん、こんなに遠くまで跳んでいたよ」

C児はもう一度同じように試し、どこまで跳んだか着地した場所を教師に尋ね
る。教師は先程と同じように指で示す。C児の遊びを見ていたD児も興味をもち、
同じように試すようになる。

D児「先生、僕も長く跳べているかな？」

教師「うん、どんどん遠くに跳べるようになってきているね」

教師は、倉庫から赤色・黄色・青色のラバーリングを持って来ることにする。「こ
こまで跳べたら赤色にしようか。それよりも少し遠い場所に黄色を置くね。一番遠
くは青色だよ。どこまで跳べるかな。」と言いながら遊具に近い方から順に並べる。

C児とD児はその様子を遊具の上から眺めている。

D児は「先生、僕がジャンプするところ見ていてね」と、黄色のラバーリングに
着地する。

教師「黄色まで跳べていたよ」

C児が「今度は私のことも見ていて」と、D児
と同じく、黄色のラバーリングに着地する。再び
D児の番になる。先程よりも力強く踏み込んで
おり、青色のラバーリングに着地する。

教師「さっきは黄色だったけれど、今は青色
まで届いたよ」



その後、C児とD児が交互に繰り返す。しばらくするとC児はその場を離れ、倉庫へ向かう。ラバーリングを幾つも抱えて戻って来る。元のラバーリングの周りに広げるようにして並べていく。C児、D児共に、新たに加わったラバーリングに着地しようとしており、正面だけではなく、斜めの方向へ跳ぶ動きが加わる。

○事例2に対する評価

(幼児理解、ねらいや内容の妥当性)

固定遊具に親しみ、使って遊ぶことを繰り返すことで遊び方に慣れ、自ら新たな動きを考えて試すようになっており、ねらいの設定は相応しいと考える。C児は初め、高い場所から跳び下りることで満足していたが、動きを重ねることでより遠くに跳ぼうとする気持ちが生まれ、力強く踏み込む姿が引き出された。

(環境構成、教師の援助)

固定遊具の使い方について、遊具の特性から引き出される動きだけでなく、幼児が自ら考えて試す様子を教師が十分に認めることで、安心して自分なりに試すことにつながったと考えられる。ラバーリングを取り入れたことで、自分の着地点が明確になり、意欲が高まった。また、普段から使っている道具であることから遊びに取り入れやすく、幼児が自分で遊びを広げていく姿へつながった。

(3) 事例3 凧と一緒に走ろう (1月中旬)

教師は、寒い時期でも戸外で遊ぶ機会が充実するようにと、新たにハガキ凧(ハガキの大きさに切った厚紙を帆にした凧)で遊ぶ機会を好きな遊びの中で取り入れる。E児が、すぐに興味をもち、赤色のクレヨンを選び、ハガキに好きな絵を描く。

描き上がると、教師と一緒に凧糸をセロテープで貼り付けて完成させ、それを持って園庭へ駆け出していく。凧糸の先を持ちながら歩いたり走ったりする。凧は時々地面から離れて浮くが、引きずっていることが多い。

教師が、「Eちゃん、凧さんと一緒にお出掛けできて楽しいね。」と声を掛けると、E児は満足した表情で保育室へ戻って来る。

しばらくして今度は、F児が凧に興味をもち、E児と同じ流れで凧を完成させ、園庭に持っていくと、力を出して思い切り走る。走っている間は凧が地面から離れ、浮いている。

教師「Fちゃんの凧、空を飛んでいるみたいだよ。」

教師の言葉を聞いてF児はさらに力を出して走るようになる。また、走りながら時々振り返っており、凧に目を向ける姿が見られる。

E児はF児の様子や教師とのやりとりをテラスから眺めている。しばらくすると、E児も再び園庭へ出掛け、凧を持って走る。一度目よりも力を出して走っており、時々後方に目を遣って浮いている凧の様子を気に掛ける様子



がある。

教師「Eちゃんの凧も空を飛んでいるみたいだね。」

E児は嬉しそうに何度も駆け回る。

○事例3に対する評価

(幼児理解、ねらいや内容の妥当性)

E児は、当初は凧揚げよりも自分の作品を所持することで満足している様子があった。F児の様子を目にすることで、新たに「凧を揚げる」ことに興味が向き、思い切り走る動きや、走りながら後方に目を向ける等、新たな動きが加わった。計画の段階では、個での取組が中心となると考え、ねらいを設定したが、友達の様子によって自分の動きを変える様子が見られた。

(環境構成、教師の援助)

教師があらかじめ出来上がった物を用意するのではなく、幼児の技能でできる余地を残しておくことで、物への愛着が沸き、幼児が自分の物として大事に使おうとする姿へつながった。製作場所や、遊び終えた後の置き場を室内と戸外の間にあるテラスに設定することで、室内外で互いのしていることに興味をもつきっかけとなった。

E児への援助に関して、初めから凧本来の遊び方にこだわって使わせるのではなく、幼児が楽しんでいることに共感する関わりを意識した。しかし、F児の様子に刺激を受けた後では、E児が「凧を揚げる」ことを意識するようになったことから、教師も幼児の興味に沿って関わりを変化させ、満足感へとつながるようにした。

7 評価を踏まえた指導計画の改善

(1) 短期の指導計画の改善

(ねらいや内容の妥当性)

- ・個々の遊びから、友達のしている遊びに興味を広がり関わりが増えていく時期であることから、友達関係に関する内容を含めることを意識しながらねらいを再考する。(事例3)

(環境の構成)

- ・幼児の実態から、水を多く使うことによって遊びの満足感が高まることを踏まえ、砂場に設置するタライの数を増やし不足することのないようにする。(事例1)
- ・前日と同じ遊びをすぐに始められるように、あらかじめラバーリングを固定遊具の側に置いておく。(事例2)

(2) 長期の指導計画の改善

- ・水と同様に感触の面白さや心地よさを感じられる指絵具を使った活動を同時期の指導計画後半に入れる。(事例1)
- ・固定遊具での遊びの中で見られた動きを整理し、長期の計画の中に下記の例のように追記することで、次年度以降の保育を組み立てるヒントとなるようにする。(事例2)

例：身近な遊具(ラバーリング、ビールケース等)を取り入れながら固定遊具を試す。

第2章-A 第2節 多様な動きを経験する p.6

固定遊具に続くように他の遊具（すのこ、短縄等）を並べコースを作る。

- ・ 凧揚げやコマ回し等、個々がじっくりと取り組んだり友達と試したりする遊びや教材を「伝統的な文化に親しむこと」と関連させながら取り入れる。（事例3）